

# 学習上の配慮を要する児童の実態と合理的配慮に関する研究

- ◎藤田 留三丸 (東京学芸大学附属世田谷小学校 副校長)  
山崎 幸一 (東京学芸大学附属学校運営部運営参事)  
○小池 敏英 (東京学芸大学特別支援科学講座発達障害学分野)  
藤野 博 (東京学芸大学特別支援科学講座支援方法学分野)  
関田 義博 (東京学芸大学附属小金井小学校 副校長)  
細井 宏一 (東京学芸大学附属大泉小学校 副校長)  
田中 一晃 (東京学芸大学附属竹早小学校 前副校長)

代表者連絡先：rumimaru@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 特別支援、合理的配慮、リテラシー

## 1 はじめに

公立小・中学校通常学級の児童生徒に対してなされた調査の結果、学習面で著しい困難を持っている児童生徒が、通常学級の児童生徒の4.5%に存在することが報告され(文部科学省, 2012)、リソースルームなど学習支援に対する方策が準備されつつある。一方、国立大学附属小・中学校における児童生徒の中に学習上の配慮を要する者がいることが報告されているが、彼らの実態とその合理的配慮について十分検討されていない。

そこで本研究は、漢字と算数の基礎的側面の学習上の問題が認めやすくなる附属小学校2年生と4年生児童を対象として、学習上の配慮を要する児童の実態と合理的配慮に関して検討することを目的とする。

## 2 方法

### 1. 対象

附属小学校2年生 341人と4年生 435人を対象とした。あわせて公立小学校通常学級に在籍する2年生 234人と4年生 221人を対象とした。調査結果については、個別の情報として小学校に報告を行った。

### 2. 調査課題

#### (1) 漢字読字・漢字書字テスト

漢字読字・漢字書字テストでは、小学1年及び3年までの配当漢字から構成される単語、それぞれ6語と10語を選び出題した。

#### (2) 漢字基礎スキルテスト

特殊音節テストは、特殊音節を含む単語を表すイラストを提示し、該当するひらがなを記入する問題である。

単語連鎖テストは、ひらがなの流暢な読みを評価する。A4用紙に14文字×14行でひらがな文字をランダムに印刷した。児童には、文字列を端から黙読し、文字列中の有意味単語を60秒内にできるだけ多く見つけて丸で囲うよう指示した。成績は総正答数とした。

聴覚記憶テストは、4桁の数字列を3問、5桁の数字列を3問計6問行った。児童には、数字列を読んで聞かせ、終了後にそれと同じ順番で数字を解答欄に書くよう指示した。聴覚記憶テストの成績は、4桁課題

3問5桁課題3問における総正答数とした。

視覚記憶テストでは、3個または4個の刺激図形と全て形が異なる選択図形、計30個(縦5個×横6個)を提示した。児童には、刺激図形を記憶するよう指示した後、次ページに提示された30個の異なる選択図形から、正答の図形を丸で囲むように指示した。刺激提示時間を10秒、課題遂行時間を30秒とした。成績は総正答数とした。

### 3. 手続き

テストは、学級児童に対し、担任教師が一斉に実施した。全テストの所要時間はおよそ20分であった。単語連鎖テスト及び、聴覚記憶テスト、視覚記憶テストは、手続きに関する説明と事前練習を行った後、本テストを行った。

## 3 結果

### 1. 漢字の読字テストと書字テストについて

2年生における読字テストと書字テストのヒストグラムを検討した結果、読字テストと書字テストの平均値は、共に附属学校と公立学校の間で有意差を認めた( $p < .01$ )。

4年生における読字テストと書字テストのヒストグラムを検討した結果、読字テストと書字テストの平均値は、共に附属学校と公立学校の間で有意差を認めた( $p < .01$ )。

### 2. 漢字の学習基礎スキルについて

本研究では、漢字の学習基礎スキルとして、ひらがなの流暢な読み(単語連鎖テスト)、特殊音節単語の読み書き(特殊音節テスト)、聴覚記憶(聴覚記憶テスト)、視覚記憶(視覚記憶テスト)をとりあげた。

2年生と4年生の学習基礎スキルの得点のヒストグラムを示したものである。ひらがなの流暢な読み、特殊音節単語の読み書き、聴覚記憶、視覚記憶ともに、低成績を示す者を両群で認めた。

### 3. 漢字の読み書き低成績のリスク要因について

漢字読み書き低成績(10パーセント以下)のリスク要因に関しては、説明変数を単語連鎖テスト、特殊音節テスト、視覚記憶テスト、聴覚記憶テストの低成績(10パーセント以下)として、多重ロジスティック分析により検討した(表1)。

## 4 考察

漢字の読み書きの達成には複数の要因が関与する。これらの要因のうちのどの要因が、漢字の読み書きの達成に関与するのか、検討することが必要である。本研究では、読み書きの低成績の生起を目的変数として、多重ロジスティック分析を行った。

その結果、漢字読みについては、附属学校で認めた有意なオッズ比は、2年で単語連鎖、4年で単語連鎖と数唱であった。公立学校では、2年で特殊音節、4年で単語連鎖と特殊音節であった。これより、附属学校では、ひらがなの流暢な読みが2年と4年で共に背景要因として関与し、4年ではさらに聴覚記憶が関与することを指摘できた。

漢字書きについては、附属学校で認めた有意なオッズ比は、2年で単語連鎖、4年で単語連鎖と数唱であった。公立学校では、2年で漢字読字、4年で単語連鎖であった。これより、附属学校では、ひらがなの流暢な読みが2年と4年で共に背景要因として関与し、4年ではさらに聴覚記憶が関与することを指摘できた。

稲垣(2010)は、ひらがなの流暢な読みは、読み書き障害の判別基準として有効であることを報告した。本研究で用いた単語連鎖テストは、ひらがなの流暢な読みの程度を反映することが報告されている(藤井

ら、2012)。従って、単語連鎖テストの低成績は、強い読み書き困難の可能性を示唆するものであり、単語連鎖テストの低成績を早期に評価することは、教育上の配慮として必要であることを指摘できる。

他方、聴覚記憶については、多くの研究で、新奇な言語材料の学習に関与することが報告されている。Duyck et al. (2003)は、構音抑制によって聴覚記憶を妨害する学習条件を設定し、この条件においてどのような学習妨害が生じるか、検討した。その結果、妨害をうける学習課題は、有意味単語と無意味単語の対連合学習であることを報告した。無意味単語は、視覚的イメージが乏しい。そのために聴覚記憶が妨害され、学習が困難になったことを推測した。漢字の読み書き学習の中でも、特に、抽象的な漢字単語については、視覚的イメージが乏しい場合がある。このような場合には、聴覚記憶の弱さがあると学習困難になることを推測できる。

本研究で、ひらがな単語の流暢な読みや聴覚記憶の弱さを、附属学校児童のリスク要因として認めた。これらのリスク要因は、LD児に多く認められ、言語発達が良好であっても発現することを指摘できる。また学習努力をしても、直接的成果を得られにくいために、学習に対する自己効力感が損なわれる可能性が高いことを指摘できる。従って、附属学校児童における学習低成績については、ひらがな単語の流暢な読みや聴覚記憶の弱さの有無を評価し、認知特徴にあわせた学習上の配慮や支援が必要であることを指摘できる(図1)。また、学習上の配慮や支援は、LD児に求められる配慮と共通的側面のあることを推測でき、さらに検討が必要である。

## 文献

Duyck, W., Szmalec., Kemps, E., & Vandierendonck, A. (2003) Verbal working memory is involved in associative word learning unless visual codes are available. *Journal of Memory and Language*, 48, 527-541.

藤井温子, 吉田有里, 徐欣薇 他(2012) 一斉指導で利用可能なひらがな単語読みの評価に関する研究. 特殊教育学研究, 50(1), 21-29.

稲垣真澄(2010) 特異的発達障害. 診断治療のための実践ガイドライン. 診断と治療社.

文部科学省(2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査について.

表1 漢字読字書字の低成績に関するオッズ比

		附属2年		公立2年		附属4年		公立4年
漢字読字	単語連鎖	3.7 (1.30-10.6)	*			33.0 (3.1-347.2)	**	4.0 (1.3-12.8)
	特殊音節			147.2 (22.0-987.1)	**	—		9.1 (2.7-29.9)
	順唱					13.3 (1.5-117.4)	*	
漢字書字	単語連鎖	3.0 (1.0-8.7)	*			4.7 (2.2-10.0)	**	10.4 (2.9-37.1)
	特殊音節					—		
	順唱					3.7 (1.5-8.6)	**	
	視覚記憶							
	漢字読字			248.3 (8.3-7445.5)	**	—		

※ 一は、説明変数から省いた課題を示している